
妖説話 The Dragon Which Attracts A Person

アマノアキマサ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

iJのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

妖説話 The Dragon Which Attracts A Person

【ZPDF】

N6252W

【作者名】

アマノアキマサ

【あらすじ】

異境都学園といつ学校がある。この学園は異能者専門の学校である。その学園の一部の生徒たちの物語。

プロローグ「夢で見てしまった過去」（前書き）

この物語はもがみとハイクションです。

プロローグ「夢で見てしまった過去」

……得体の知れないものが田の前にいる。僕の田の前に。

氣味が悪い「めき声」をあげている『それ』は、見ているだけで人を不快にしてくれる。

だけど、僕は『それ』に手を伸ばして……ためらいなく口に運ぶ。もちろん、食べるために。

でも、これはいつものこと。僕が背負った宿命であり、この世で一番幸福なこと。

『それ』らはおこしにのだ。僕にとって。

だが、今日の『それ』は違つた。

……血、血なまぐさい。まずい。見た目だけではなく味まで人を不快にするのか。

あまりの不味さに口もだえ苦しんでいると、頭に声が響いてきた。

これまた不快な声。人をあざけるような笑い声。

そしてこの声は不可解でもあった。僕の声だ。

なんで？と思ったが、すぐ気がついた。『意識』の外から聞こえるのだと。

だから、僕は目を開けてしまった。だから、僕は見てしまった。

僕が同僚を殺し、嘲笑わらってしているのを。

プロローグ「夢で見てしまった過去」（後書き）

これも週一が目標です

龍 ?（前書き）

登場人物1

一条龍哉

男 15才

12月7日生

身長175cm

体重60kg

異境都學園中央校高等部妖人科1年B組所属

特能呪詛スキル

種族 妖人（正体不明）

水系の魔法が得意

得物は異刀『球沈め』

龍 ?

「龍哉様。お元気があつませんが、ビックリが具合でもお悪いんですか？」

「いや。いたつて健康だが……そんなに調子悪そうに見えたのか？」

「はい。少しお暗いので」

「暗い……か。まあ、テンションは低いからそつと見ても不思議じやないか」

心配されないようこいつもの自分を演じていたつもりだったんだが、（俺に対してのみ）観察力の高い奈々にはビックリ無駄だったらしい。

「昔の嫌な思い出を夢で見ちまつたんだよ、今朝

「どんな夢だつたんですか」

「…………」

よし、唐突だがここでのデリカシーのない童顔の女を紹介しよう。
異境都学園中央校高等部魔術科一年の落合奈々である。

髪と目の色は水色で、顔に似合わない大きな胸の持ち主の美少女である。

だがしかし、こいつがかわいいのは今はビックリしている。

「このプロフィールで今重要なのは、完全な日本人であるということだ。

‘嫌な’という単語の意味を知らないわけがないのだ！

もう少し気を使え、気を。

そんなんだから俺とあいつ以外に友達ができなかつたんだよ。

「何か失礼な」とお考えになさつていませんか。龍哉様」

小説なんか読んでいるとたまに主人公の考へてていることが他人にばれちゃつてるみたいな展開があるが、どうしてわかるのだろう。そもそも

「人のこと無視しないでください！私は放置プレイでじつすらゆつな変態さんではありませんよ！」

人の思考の邪魔しないでほしいな。そうだ！

「いや、客観的にみたありのままの事実だから」

「はい？何をおっしゃつておられるのですか？言葉のキャッチボールが成り立つていな」のですが……」

「いやいや似たようなものだろ」

「ですからー何をおっしゃつてお

「

「なんとなくおまえの発言に對しての返答を一つかつぱりしてみたんだが？」

「ツー？」

自分がからかわれているのに気づいた奈々は顔を赤らめた。理由は

「龍哉様にいじめられると私はとっても気持ちが高揚するのですが……。これは恋なのでしょうか?」

「たぶん、いや間違いなく異常な性癖だ」

こつやつて自分が異常であることを諭してやるつと日々努力しているのだが、どうも効果がないようだから話題を変えよ。

「そういえば制服改造したんだよな、ゴスロリに。自分でやったのか?」

「はい。あとこれはロリータです。龍哉様は改造なさってないですよね?何を武装なさっているのですか?」

「《珠沈め》っていう“異”の称号を持つた刀だ」

「伊藤ですか」

「異刀だ。漢字が違うぞ」

今日から俺たちが通うことになる異境都学園の中央校はほかの分校と比べると変わった校則が多い。その一つに制服の改造または称号を持った物（特に武器）の携帯が義務付けられているというものがいる。俺はこれが気になつたので清明に聞いてみたところ。

『個性が特異能力の成長のカギになるからだよ』

という個性の主張が目的です！みたいな返事が返ってきたので、私服でいいじゃんかと突っ込むと、

『一応教育機関だから』

と返してきた。なんだよそれ。

「着きましたよ、龍哉様。クラス分け見に行きましょう」

「そうだな。うわあ！人多い！たく、クラス分け表ぐらい寮に送つてこいよ。妖人科は……左端だな。確認し終わったら声掛けてくれ」

奈々と別れた俺は、妖人科のクラスA・B・C組の中から自分の名前を探す。こういうとき一條という名字はとても便利だ。なにしろ上のほうにあるんだ。すぐ見つかる……ほらあった。B組の4番だ。ついでに旧友の名前も発見した。

事は済んだし、さつさとこの人ごみから離れよう。

「龍哉様」

と、俺が人ごみから抜けだした直後に奈々が声をかけてきた。

「意外と早かつたな。もう少しかかると思ってたぞ。お前、ウォーリーを探せとか苦手だし」

「人の名前をあの紅白のしましま男と一緒にしないで頂けますか。そんなことより何組でしたか？私はD組でした」

「B組だったが聞いたってどうにもならんぞ。校舎違うし、昇降口

も違つて

「へえ？」

「なんだ、知らなかつたのか。ここは学科とに別々の校舎があるんだよ。連絡通路はあるがな」

「そうでしたか…………知りませんでした」

どうしてここまでへむだらうか。てか、自分の通りといふべく調べとけよ。

「じゃ、俺もう教室行くから。また帰りにな

「ーはー！また帰りー！」

今度はとても機嫌だ。感情の起伏が激しいやつだ。俺は奈々に見送られながら自分の教室へと向かつた。しかし、久しぶりにあいつに会えるのか。少し楽しみだな。今、登校中よりはるかにテンションが高くなっている俺は、第三者からみれば奈々のこと言えない感情の起伏が激しい奴だろう。

龍 ? (後書き)

いつのまつが真作です

響
？（前書き）

登場人物2

落合奈々 女 15才 1月19日生

身長159cm

体重43kg

異境都学園中央校高等部魔術科1年D組所属

特能 雷法

種族 魔術師

電気系の魔法が得意

響
?

みなさん。おはようございます。そしてはじめまして。
私は泉響子といいます。

身長167?

体重45?

スリーサイズ秘密

平熱33.5の女の子です。

私のプロフィールに疑問を持つ方もおられるでしょうが、それは置いておいてください。

では、みなさん。自己紹介を終えたところで質問します。

『超人が実際いたらどう思いますか?』

なぜこんなことを聞くのかって?

そんなこと決まっています。私たちの世界にその超人がいるからです。しかもかなりの数いるのです。

この世界では超人は異能者と呼ばれており、社会に必要とされます。

その理由は、化け物がいるからです。

普通の人から見て異能者は化け物じみでいるかもしれません、その化け物たちは異能者からみても化物です。

そんな化け物たちは人を襲うので、化け物じみた者たちが退治しなければなりません。

だからこの世界にはミステイックスクールと呼ばれる異能者専門の訓練学校があります。

日本におけるそれは異境都学園です。

総生徒数1万人超の大規模な教育機関であり、人口1万人超の都市でもあり、異能者を閉じ込めておく大きな檻もあります。

私はその檻の中で暮らしています。

そうです。私も異能者。

人竜
蛟で流
一門のお荷物、
泉家の一人娘。

しかし実力主義のこの学園では出身がどことかは何の意味も持たない。強い者でいい。

まあ、裏を返せば自分がどんなに頑張っても泉の汚名は返上できたりしないのだ。

なんか暗くなってしまった（私が）ので、私は頬をたたき复合を入れる。

今日二月六日始業式である

7時30分に寮を出る。いつもよりは10分早い。
だが同じ寮に住んでいる娘たちよりは遅かった。

別に遅刻しそうなわけではない。北校の娘たちが早すぎるのだ。

和仁作然念力不道。詩一在不生相口口不

3クラスから自分の名前をさ
――

自分の名前を探す前に、ある人物の名前が目に入ってきた。

卷之三

北小での同級生で友達で、私の……思い人だ。

そしてその上に自分の名前があつた。

未刊稿室へ足を止めた

(龍くんの真ん前！はなせるのはうれしいけど近すぎる！授業ちゃ
んと聞けるかな……………といふか覚えてるかな私のこと)

と考へてゐると前方から大きな声が聞こえてきた。

「響ひや～～～～～～～～～～～ん！～！」

姫ちゃんこと小田姫代。私の親友で1年にして生徒会書記である。元気ハツラツ少女で、明るい娘。

「響ちゃん。響ちゃん。何組だった？B組だったよね？龍くんも一緒だったよね？うれしいよね？」

「知ってるなら聞かなくてもいいでしょ。ほら、仕事に戻った。いそがしいでしょ？」

「そうなんだよ。忙しいんだよ。じゃ私もB組だからーまた会おう！…！」

会おう、といいきつたと同時に姫ちゃんは走り去つて行つた。疾風のようだ。

(廊下を走るな、生徒会会計)

私はどうしようもない親友をどうやってしつけようかと考えながら教室に入り、自分の席のうしろで何らかを描いている男子に声をかけた。

「久しぶり、龍くん」

彼は声をかけられてやつと自分の前の席に人が座つたのに気づいたらしかつた。

「響子。やつと来たか。ほんと久しぶりだな」

「どうやら私のことねぼえていてくれたようだ。」

「私がおんなじクラスだつて知つてたの？」

「自分の名前の上ぐらには田に入るほつが普通だが？」

「あ、そうだよね。また一年間よろしくねー。」

「ああ、よろしく頼むよ親友」

龍くんの中では私は親友だつたらしい。
(親友つて言われるのはうれしいけどなんかさみしいな。異性としてみてもうれてないような気がして)

「姫ちゃんもこのクラスだつて

「知つてる。わざ風のよひにせきつてきて風のよひに帰つていった
よ。相変わらずだな、あいつ」

「やうだね。姫ちゃんは変わんないね」

「お前も變つてないけど」

「龍くんだつて變わつてないよ」

「それもそだな」と彼は笑い、私を笑つた。
彼をみていろと自然と笑顔になつてしまふ。私じんだけこの人のこ
と好きなんだろつ?

「やういえば何描いてるの?」

「陣だよ。名前は……ジーットイといふかな」

「?龍くん魔法使うの?特能何?」

「ひみつ～」

「いや、シャンパーのじゅみみたいに言わないで教えてよ」

「ひみつ～」

「…………」

教える気は全くないよつだ。ちょうど担任となる先生が教室に入ってきたので、私は聞き出すのを中止にすることにした。
すいじく氣になるけど。

龍 ? (前書き)

登場人物 3
泉響子 女 15才 12月7日生

身長 167cm

体重 45kg

異境都學園中央校高等部妖人科1年B組所属

特能涙 ヒール

種族 人竜 蛟

剣術が得意

得物は退魔刀『維切』

始業式はあつとこう間に終わった。

生徒より教師のほうが短氣だからであろう。

おしゃべりをしたらどうなるのかわかっている生徒たちはただ静かに立つており、校長は手短に話し、教師陣も喧嘩にならないよう口を開かないと通夜のようだつた。

教室に並んで戻つた俺たちを待つていたのは、テストだつた。英語と数学と保健の三つだ。

簡単すぎて話にならないでテストで時間と紙がもつたいないとしかいいようがなかつた。

そしてただいまHR中。

担任の女教師が明日の予定について話している。

そんな中響子の奴はちらちらと後ろにいる俺のことみてくる。たぶん今朝の質問に答えなかつたからだろう。まあ適当に答えておくか。どうせばれないし。

「一條。 明日何時登校だ」

担任に訊かれてしまつた。人の話を聞いてないと思われたのだろう。絶対、響子のほうが聞いてなかつたと俺は思つがな。

と、かえすと舌打ちしてやがる。いいのか教師がこんなので？

「9時」

「よし、説明終わりだ。解散」

11時半ちよつけどお昼時。どつかで食べて帰るかと考えていると、

「龍くん、一緒に帰らない?」

と、響子が声をかけてきて、

「龍くん、響ちゃん、ご飯を食べに行こうよ」

と、姫代はさも当たり前のように俺たちに大声をかけてきた。
声がでかすぎるだよ、お前。ほら、クラスの男子から恨めしそうな
視線を感じるは。お前ら人気あるんだな。

つと、クラスの何人かと先生がビクッとなにかに反応した。すごい
な、北校にはあれを感知できた奴はあいつしかいなかつたのに。
怒氣や殺氣の量(?)を半分に分け、それぞれをぶつけて打ち消し、
体外に放出する量をきわめて弱くする俺が創った魔法だ。

「俺は勉強できるのにアホな奴がきらいなんだよな」

俺はそうひとりごとを小さく呟いたつもりだったが、
姫代は「そうなの?」と小さな声でかえしてきた。

中央校つて化け物揃いなのか?
そう思いながら俺は一人を置いて席をたち、廊下に出ると、
やはり笑顔の鬼がいた。

俺が今朝言った「また帰りに」は、教室まで来るんじゃないぞ、つ
て意味だったのだが伝わらなかつたらしい。

俺が昇降口前で待つてろよ、とツツコむ前に

「龍哉様はとってもおモテになりますね。万年モテ期ですか？この野郎！」

「『様』付けしている相手[元]の野郎とか言つてますよ。おかしいですよ、奈々さん」

「何を言つてゐるんだか。あなただつて私のこと『さん』付けて呼ん
だ」となほじやない、
<「うぶや><「ゆ>籠書

v - r b v v r o v (v - r o v v r t v . . v - r t v v r o v

やつた！奈々が俺に対しても敬語使うのやめてくれた

現実逃避している場合でなかつたな。

のやねせこみことおまかこ。

「龍くん。だれだれその子! もしかして、彼女? 隅に置けないね」「

二〇一

そこにやつてきた二人。

姫代は勝手な解釈をして意味深な笑顔を浮かべている。響子は奈々の顔を見て泣きそうになつてゐる。

はす。ん?

だが二人の登場だけで奈々の怒気はなくなつていた。

な顔をしていた。

「奈々？」

「……龍哉様。そちらのお一人は？」

声色もどこか残念そうだった。

「ああ、俺の北小の頃からの友達でクラスメイトの小田姫代さんと泉響子さんだ。姫代、響子、この子は北中からの友達、落合奈々・・だ」

「はじめまして、姫代だよー・ようじへー・」

「はじめまして、泉響子です」

「お初にお目にかかります。落合奈々と申します。以後お見知り置きを……ところで龍哉様なぜ私だけ『ちやん』づけなのですか？」

「ああ～せいやえてたんだ（棒読み）」

「私も聞こえた」

「？」

響子だけ、何の話？みたいな顔してたが放つておこう。
俺のセリフの『・・』には『ちやん』がはいる。

聞き取るなよ！

「なんか知らないけど、逆ギレはよくないよ？」

響子に冷静なツッコミをいれられてしまった。

「…………響子がこると調子狂うな。どうしようかな、これから」

「やつですね。本来なら

『逆ギレですか!』

『別にお前が童顔など子供扱いしているのとは関係ないだからなー!』

『無視ですか! あとシンデレミたいの中に私を子供扱いしていると
いう聞き捨てならない事実が!』

『しまった! 妹扱いの間違いだった!』

のよつなくだりからお一人に参加していただこうと思つてお
りましたが……響子さんが冷静すぎるのと、龍哉様が声の大きさ
をお間違えになつたせいで続きませんでしたね

「ええ～俺のせい?」

「はい」

「あははははは。ふたりとも面白いーいつもこんな感じなの?」

「まあ、まじめにやらなくともこいつもこんな感じ」

「それよつ響子さんを混せたときいちよんと回すように考えましょ
う」

「やつだな

「私も混ぜて~」

俺たちが今朝同様あほな会話をしている間、響子はぽかんとしてい

た。

なんかごめん。

龍 ? (後書き)

改訂版…やつとかけましたよー。

**書
? (前書き)**

龍
?を10月23日に改定いたしました。

私なりに頑張ったのですが……結局ついていけませんでした、龍くんと奈々さんの乗りに。

私は姫ちゃんといることが多いので、自分はノリがいいほうです。自称ではないですよ、みんなによく言われるんです。その私がついていけなかつた理由は一つです。

龍くんが変わったのに驚いたからです。

小学校の頃の龍くんは人づきあいの悪い子で、ビことなく人を避けている子でした。目立つのが嫌いな子でした。そんな彼が人前でコントのようなやり取りをしたのです。はつきりいつて腰を抜かしそうでした。

そして現在は4人で下校中。みんな住んでる方向が同じなので誰かが遠回りするということはない。中央校には初等部 小学部が存在しない。だから在席していた分校がある地域に住むのが普通だ。ああ。すみません。異境都学園の説明をするのを忘れてました。

異境都学園。

日本に存在するミステイックスクールで、世界でも最大級の規模と在学者を誇る。

また、世界で初めて建設が決まった学校である。ちなみに完成、開校は一番じゃないそうです。

ミステイックスクールの中ではかなり変わっている。ミステイックスクールはそれぞれ入学できる異能者の種類は決まっている。

また、一つの町であり、学生と教師はその町の寮で暮らすことが義務である。

入学できる種族が決まっているのは、同族のほうが教えるのに効率がいいのといえばこざが起きにくいだろうと考えられているからだ。寮制のほうは怪物を監視するのに都合がいいからであり、そのため町の外に出るには事前に許可がいる。

だが、この学園は寮制のほうは変わりませんが、同じ敷地内に様々な異能者が住んでいる。

そのかわりに学校が五つに分かれていて、それぞれ特色がある。私たちが通っている本校 中央校は、特異能力（通称、特能）と呼ばれている能力をもつ学生のみが在席できる。逆を言えば特能さえ持つていれば入れる学校だ。

目的は特能の解析。いわば、研究機関である。

それ以外の分校は、北が妖人、東が超能力者、西が魔術師を専門に育成しているが、種族重視のほかのミステイックスクールとは違い、才能さえあれば誰でも入れる。

南校は、魔具などのアイテムを作つたり直したりする工業的分野や普通でない生物について勉強できたりする。

だが、これは高等部（中央校は違う）からの話である。そのため、小学部、中学部は自分の希望する学校に入れる。だから奈々さんのように魔術師なのに北校に通っていた、ということもある。もっとも、そういう人は少ないらしいが。

なんだか長い説明になってしましました。

では、この話は置いといて、私には気になることがあります。

龍くんの変化と奈々さんについてです。

まあ、龍くんのほうはなんとなく予想がつきます。だって私は親友ですから、彼がどういう性格をしているのか知っています。

やさしくて社交的なのです、彼は。

だから北小時代に人を避けていたのには理由があり、その枷のようなものがなくなつたからやりたいようにやれるようになった、と私

は考えてこます。

奈々さんのほうは

なんで奈々さんはと龍くんの掛け合いがいつもこんな感じなんですか
?といつといろでしょ。う。

私と響ちゃんは龍くんと仲良くなつたきっかけは、ちょっととした事
件があつたからです。

彼の幼馴染である茉莉が言ひこな、龍くんとかかわるにイベント
が必要だそ�です。

だとすると、奈々さんも同じように事件に巻き込まれたか、事件を
起こしてこるのでしょ。う。

私が気にしているのはこの後です。

もし、その事件が龍くんの枷を外したとしたら?
もし、彼女が彼を解放したなら?

彼は彼女を特別視しているかもしません。

だから、超気になります。

はつきり言つて見た目で奈々さんに勝てる気がしません。
その上イベントが私より彼にとつて印象深いものだつたら、勝機は
ないでしょ。

今、ちょうど龍くんと姫ちゃんが話していて、奈々さん一人が離れ
ている。質問するには好機だ。

「奈々さん」

「なんですか?響子さん?」

「あの龍くんとは

「響子さんは龍哉様とさじつこつたお関係ですか?」

逆に質問されてしまった。

どうして今このタイミングで私に訊いてきたのかわからなかつたが、私は「親友だよ」と答えた。

「懸想しているなら、していふとはつきり答えたらいづですか。私の聞き方もよくはなかつたかもしれませんが」

「え…」

「あとついでに、龍哉様に見蕩れではいませんよね？」

「？」

どういふこと？

「…………となりますが、響子さんは恋敵ですか。なかなか強敵ですね。ちなみにあなたがしようとしていらっしゃった質問ですが、龍哉様は私を特別視などされておられませんので安心を」

そういうと彼女は龍くんと姫ちゃんのほうに近づいて行つた
見蕩れの意味は分からなかつたが、まだ何とかなりそうなことはわかつたからよしとしよう。

「響ちゃん。お昼何がいい~？」

姫ちゃんに声をかけられたので、三人に近づく。これからみんなでお昼を取ろうということになつたので私にも聞いたらしい。
なんでもいいよと答えると、みんなそう言うと姫ちゃんはあきれ、
ファミレスにしようと提案し私たちを先導しました。

「響子。奈々とは仲良くなれた？」

「どうかな」

「奈々は気難しいところもあるがいい奴だと思つから、仲良くなれて
あげてくれ」

「うん。わかった」

龍くんに言われなくたって仲良くするよ。
だって奈々さん、私の知らないこと知ってるみたいだから。
私なんかで勝てるかな、奈々さんに。

響 ? (後書き)

会話文をメインにして書いたと強めてのこ

奈々 ? (前書き)

下書きのストックがなくなつてきた!

奈々 ?

？
。
。
。
。
。

なぜ私が語りなのですか？

へえ？

始業式の日の昼間のアレについて説明しない？
嫌ですよ。

龍哉様のことは龍哉様自身がお話しなりねばねばです。

はい？

許可ひとつおられるのですか？

だったらなぜあなたが書かないのですか？

忙しい？

編集作業で忙しい？

ああ～。

そうですね～。

あなたが面倒くさがってやらないだけですね～。

嘘は言つていませんよ。

龍哉様も響子さんもついでに私も、字はきれいですし誤字もほとん

えりこせんし、ね。

あ、ちよっと何をするのですか！
ちよ、ち～め～～～～～～～～！

じゅうべお待ちください

何の話でしたか？

すみません。
とあるよく逆ギレするシンテレでペッタソなアバズレが私の部屋
で暴れてくれたので、片付けるのに手間取ってしまいました。

ああ、そうでした。

龍哉様のことでしたね。

龍哉様はとても魅力的な男性です。

話をしたことがある人間ならわかるのですが、龍哉様は人たらしであります。

異性同性関係なく人に好かれます。

とても魅力的であるから、異性から好意を持たれることが多いです。厄介なことです。

ですが、異性としての好意には2種類あるのです。

ひとつ目が、私や響子さんのように龍哉様に惚れているタイプ。

ふたつ目は、龍哉様に見瀉れてい 魅了されているタイプ。

この二つには、普通なら大きな差でないかもしません。

しかし、龍哉様に対してとなると天と地、いいえマリアナ海溝チャレンジャー海淵の底と大気圏の外の外気圏くらいの差、といつてもいいでしょう。

そのぐらい大きな差です。

なぜなら、龍哉様にはある呪いがかかっているからです。

『魅了』

人を虜にする呪いが。

龍哉様曰く、「自分にかかっているのはだいぶ弱いものではある」らしいです。

しかし、『魅了』そのものはとても強力な呪い。

いくら弱いほうといつても普通に生活しているだけで目立つ、と茉莉は言っていました。

目立つようなことはホントに嫌いだったのでね、と《氷姫》^{ひょうけい}は言つていました。

だから苦労していろたんだよ、と龍哉様の弟分と妹分は言つていました。

これが龍哉様についての解説です。

満足しましたか？茉莉。^{アバズレ}

奈々　?（後書き）

最後の一言見る限り茉莉ちゃんは編集してないですね。

響
？（前書き）

新キャラ登場！？

「なんで聖佳までいるんだよ、泉先輩だけじゃなかつたんですか」「なにかな、その言い方！あたしは響子先輩の相方なんだよ！つていうか渡はいらないから帰んな！」

「二人とも落ち着いて」

現在AM2：30。廃校。

私は後輩の長いとも短いとも言えない中途半端の髪で私と同じくらいの背の少年の犬飼渡と、槍私より少し背の低い猫のような少女の猫丸聖佳といふ。

私は高一で二人は中二である。
なぜ私たちがこんな時間に外にいるかといわれると部活をしに来ている。

『特力会』

私たちはこの部活に所属している。

一般の部活と違つてスカウト制の上に理事長の許可がないと入れない部活である。

活動内容は私たちがここにいることから察してほしいが一応説明しておく。

深夜に廃校を一人以上で警備すること、ただそれだけ。昼間にやることはない。

今日は欠番が出たので私たち三人がかりだされた。
ちなみに渡くんは傀儡師妖使いの犬使い、聖佳ちゃんは妖人の化猫ばけねこである。

二人は幼馴染らしく普段は仲がいいのだが……。

「あなたとはいすれ決着つけなくてはいけなかつたので今つけるよ！」

「上等だ……表出る！」

「上等だ……表出る！」

今日は何だがもめている。

「やめなさいって。ところよつここの表つてどい？・中央校？」

「な、なんか言つてみたかつただけです！」

「…………だつわ」

「なんだと！」

「二人ともいいかげんにしなさい！」

「「…………」」

「一人とも黙つてしまつた。少し強すぎたかな？」

「けんかしてたらこの部活の意味がないでしょ。クラスはどう？」

「問題ないです」

「わたしもです」

「クラス編成には問題ないのに何で二人とも機嫌悪いの？」

「だつて、聖佳が

「ツ！？」

渡くんが説明しようとしたとき、彼は『何か』に反応した。もちろん私も聖佳ちゃんも『何か』の存在を感じ取った。

「行きますか？先輩」

「当り前よ。聖佳ちゃん敵は？」

「北側ですね」

「そう、渡くん聖佳ちゃんいくよ

」「了解」

わたしたちは敵のいるところへ田指していった。

「なんだ人間。邪魔するな

私たちが『廃校』の北側につくとそこに妖怪がいた。

「鎌鼬…………。しかも三体も」

「…………渡くん。学校側に連絡。援軍要請。聖佳ちゃんは私と一緒に

」「了解」

私と聖佳ちゃんは駆け出し人竜態、妖人態に変化し鎌鼬と交戦を開始する。妖怪との近接格闘は危険だが、人竜や妖人はこの手の戦闘のほうが得意だ。

なぜなら人竜や妖人は、妖怪の血をひいているからだ。

そのため運動神経や格闘能力、戦闘におけるセンスが常人や魔術師などよりはるかに高く、怪我の治りも早い。

といつても妖怪に対抗できるだけの力があるというだけで、退治するという能力は魔術師たちよりかなり劣っている。

だから“退魔”などの称号を持った武器を使う。

聖佳ちゃんは退魔槍 『ウエストン』、私は退魔刀『維切』を得物としている。

「なんだ！この猫耳女速いぞ！」

「あたしは猫なんだよ！」

「あれ、切れてる……？」

聖佳ちゃんは槍を支えとして両足蹴りを入れる。だが、

「聖佳！鎌鼬は風使い、風の刃で人を斬る！素手でやるな！」

「わかった」

渡くんの指示により彼女は槍での攻撃に切り替えた。連絡を終えた渡くんも狗神を出して加勢する。だが、

「あなたの犬、邪魔よ！先輩のほうに加勢しなさい！」

「つるさい。先輩よりお前のほうが弱いだろーー！」

今日に限って仲が悪かつたのだ。
それは戦闘においては命取り。

「スキあり

バシユツ

「「聖佳（ちやん）……」「

彼女は斬られてしまった。

「クツ！？」

私は相手していた鎌鼬二体を水弾でふつ飛ばし、彼女のもとへ駆け寄る。

彼女を斬った鎌鼬はふつ飛ばされた二体のもとへ行き、みんなして逃げて行つた。

「いら待て！追え！」

渡くんはかなり狼狽していたが狗神にあとを追わせた。

「聖佳ちゃん！」

「せ、先つ……輩……」

「しゃべっちゃダメ！」

かなり傷が深かつた。妖人はけがの治りが早いといったが限度がある。このままほっておいたら死んでしまう。

私は泣いた。彼女が重傷を負つたからではない。彼女の傷をいやすために泣いた。涙を流した。

涙の落ちたところが治つていいく。

これが私の特能 涙^{ヒール}。あらゆる外傷や毒を治したりむいたりする力のある涙を流す能力。あまり強い効力は持たないが応急処置としては有効だ。だが失った血まで元には戻せない。彼女は危険な状態だ。

「渡くん。狗神を引かして私たちの周りも守つて」

「で、でも」

「聖佳ちゃん守ることのほうが重要」

「は、はい」

彼が狗神を集めた数分後、応援が駆けつけた。

翌日の放課後

「元気ないな、響子。田の前であからさまな落ち込みみて見ぬふりは一日が限界なので言いたくなくても話せ」

龍くんに心配されていた。『特力会』の存在は中央校に中等部からいる者はみな知っているから、話してもいいが、私の失敗である昨日のことは話したくない。ごまかして逃げよ。

「ちょっと朝から体調が悪いの。だから一緒に寄り道できないから、じゃーね」

私は何食わぬ顔で席を立ち帰ろうとした。
だが、龍くんに腕を掴まれた。

「話せって言ってんだよ。逃げんな

「 ツ！？」

私は驚いてしまった。いや、気押されてしまったのか。

昨日の夜、私は一人の喧嘩を止めるために『蛇睨み』という技を使つた。この技は相手の思考を停止させることができる蛇の技。

龍くんは蛇の妖人？

「黙つてんなよ。親友だろ？それと一人で抱え込むな

「あ、ありがとう」

龍くんの目には強い意志が込められていた。

龍くんはやさしい。たぶん、抱え込んだ結果の最悪な事態を避けようとしたのだろう。

私は龍くんに相談することにした。

龍 ?
(前書き)

久々投かん

龍
?

「特力会?」

「そう。正式には特異能力研究会。その名の通り、特能も研究するための部活動で現在は三つに分かれて活動している」

俺は響子から話を聞いていた。俺たち以外誰もいない。奈々にも先に帰つてもらつた。

俺はこの学園の『施設』で育つたから裏のことはいろいろ知つてゐるが、特力会については初耳だ。なぜ清明と茉莉は何も教えてくれなかつたのだろう。

「でもそれは表向き。実際にやつているのは戦闘」

「?何と戦つているんだ?」

「もちろん、妖怪とだよ」

「はあ?」

この学園には実戦教育として高2の夏から一般や政府からの駆除、退治依頼が受けられるようになつていて、また高3ではそれらの依頼を受けないと単位がもらえないようにもなつていて、

早くから実戦をしたいという奴も少なくはないのでそのため制度もあるが、その制度の中には『特力会』という名前はない。だから実際に妖怪と戦う部活などは存在しないはずだ。

「特力会は『廃校』と呼ばれている場所の夜間警備を行つてゐる」

「『廃校』って何にあるんだよ」

「中央校にはそこへつながつてゐる扉があるんだよ」

「中央校にそんな秘密の扉があつたのか」

「うん。それで」

「その『廃校』とやらこななぜか妖怪が現れるので退治すると

「そんなどころだよ」

「で、お前はなんかミスちやつたんだな」

「うん。私がしつかりしてなかつたから。後輩が怪我しちやつて
自分でせいで他人が傷ついた……ね。」
「うのはビリアドバイスすべきか。

彼女の落ち込んだ姿をみた俺はそう考えながら黙つてしまつてゐた。
そんな様子を見て何を思ったのか響子は立ち上がつた。

「ごめんね。こんな話して。あと昨日逃がしちやつてるから。今夜
もあるの。だからもう帰るね」

彼女はそつと戻りつつあるので一つ尋ねてみた。

「その後輩つて誰？」

なんだか聞いてみたかった。もしかすると清明や茉莉が黙つてた理由のヒントになるかもしけなかつたからだ。

「聖佳。中3の猫丸聖佳ちゃんつて子だよ」

響子は俺に背を向けたままそう言い、教室から出て行つた。彼女の声には後悔と怒りがにじみ出でていた。

「…………」

俺は数分黙つていたがもうあたりに誰もいないことに特に響子がいなことを確認してから口を開いた。

「…………だから黙つていやがつたのか。何考えてんだか、あいつら

俺はケータイを取り出しある番号にかける。去年の秋からかかつてこない番号だ。どんだけ後ろめたく思つてんだか、俺は氣にしてないのに。

『プルルルウウウ、プルルルウウウ、プルルルウウウ、な、なによ』

ちゃんと出ただけえらいか。

『『アレ』がある武器庫の場所と『廃校』への入り口を教えろ』

『な！？だ、誰からそれ聞いたの！』

『いいから黙つて教えろ』

』…………『

かなり長めの沈黙だった。付き合には奈々や響子より長いから「われから何しようとしているのか分かっているからだらう。

『アレは にある。扉は 』

彼女からやつと答えが返ってきた。

「あんがど。あと去年のことは気にすんな。むしろ俺は感謝しているから」

『気をつけてね、龍哉』

彼女はやつ心配そうに言いつたまま電話を切った。まったく神経使いすぎなんだよ、もう少し気楽に接してもらえたものかね。

俺はそう思ひながら席を立ち帰路に就く。

「どこつも」こつもこつからそんな他人行事になつたんだか。みつちくわ

俺はまずアレのある武器庫へと足を運んだ。

「リリか

「リリかしましたか?」

俺のことを不審に思ったのか警備員が近づいてきた。これは好都合。五時間後その警備員がトイレで眠っているのが発見された。

響
?

ケータイが鳴つた。

送り主は学園だった。

こんな早くに召集？どうしたのだろうか。

ケータイに示された場所は夜警の集合場所ではなく、

「中央校の武器庫？」

私は現場に到着したのはそれから10分ぐらい後だった。
その時にはもう第二特力会『風紀委員会』が警備をしていた。

「第三特力会『アウトロー』の泉響子です」

私は特力会の身分証明書、便宜上『会員手帳』を見せてから建物に入つた。

「やあ。響子ちゃん、早かつたね」

入つてすぐに声をかけてきたのは『アウトロー』の部長成瀬兼太であつた。

龍くんと同じで優男ではあるが何を考えているかわからない人だ。

「はい。ちょうど食器を洗い終わつたところでしたから」

「泉。来たか。こっち来てくれ」

警備員の使つている部屋の中にいた誰かに声をかけられた。この声はおやじく

「北条生徒会長。なんですか？」

私は振り返つて黒髪でグリーンの目の女性に返事をする。

彼女は中央校高等部2年A組の北条ふしみ先輩。超が付くほどの中強を意味する『中央校生徒会会長』である。

「ん。今から30分ほど前に警備員の一人が下着一枚で縛られていのが見つかった。おそらく錯覚魔法でそいつに化けここに侵入したんだろ？。盗難物がないかのチェックを手伝ってくれ」

「はい」

私は保管庫の奥のほうのチェック始める。
ん？

開始早々のことだった。ふと田にとまつた箱があつた。なんとなく私はその箱を開けてみた。

「…………パンパ。先輩！見つけました！」

私が空っぽの箱を見つけすぐに生徒会副会長が到着し該当物について調べ始められた。

「登録番号2490番。中身不明。所有者は成魂院茉莉」

「理事長の姪か……」

「はい。引き出した形跡はなしですね。重量から今回の盗難されたのでしょうか。本人に連絡入れとりますね」

盗まれたのは戌魂院さんのものだった。

戌魂院家。陰陽師の一族で日本の異能者をまとめている一族でもある。異境都学園の理事長もそこの出身である。

「被害者は分かった。次は犯人だ。使用魔法と魔力の特定は?」

会長は生徒会書記・仕事モードの姫ちゃんに話しかける。

「これといって手がかりがありません。ただ…………」

「ただ?」

そう私が尋ねると彼女は表情を曇らせながらこう答えた。

「魔力反応がありますん」

「「なに」」「

「え?えええええええ!」

あり得ないことだった。いやあり得なくはないことなのだがそれが事実ならかなり犯人は賢く異常だ。

なぜなら、魔法は精霊と呼ばれる実体なきエネルギーを集めて使う『精霊魔法』と使用者の魔力だけで発動する『魔導魔法』の二つに分かれる。

そして今回使われたと思われる『錯覚魔法』と呼ばれる隠ぺい用の魔法は、後者にしかないからだ。

となると魔力は少なからず使った場所に残る。その上魔力は人によつて違う。だから誰が使ったのか分かる。

だが今回は魔力が残っていない。となると『精霊魔法』を使ったことになるか、妖術（妖人が妖力を使って魔法のような効力を出した物）を使ったことになる。

「…………妖力反応も調べといてくれ」

「はい」

北条会長は険しい表情をしながら姫ちゃんに指示を出した。

会長さんは妖術と見ていた。魔法式・魔法陣はダニーでおとりだと。私だってそう思う。精霊魔法は使用者の魔力に頼らなくてもいいという利点もあるが、開発に時間と労力がたくさん必要だからだ。
あれ？

私はその時、違和感を感じた。なんか見逃しているような感じの。

「会長。妖力もダメです」

姫ちゃんの報告に会長は固まる。

「…………次に超能力者で検索…………」

「はい」

「会長。戌魂院四年生への連絡が終わりました。こちらに来ていただきるよつです」

「やつか…………」

会長さんは頭を抱えていた。それはそうだ。今回は複数犯とみて間違いなくなつた。となると犯人生徒たちたちと戦闘を行う確率は高くなる。特力会側としては武力行使は避けたいものであるからである。

「…………会長。ダメでした…………」

「…………」

「…………」

「ふしみちゃん。落ち着いて」

長い沈黙は全身を震わせている北条生徒会長。
短いのは私、姫ちゃん、副会長。

ただ一人言葉を発したのは兼太先輩だ。

「こ・れ・が・お・ち・つ・い・て・い・ら・れ・る・かあああ
ああああああああああああああ……」

会長さんは咆哮した。久々にみたよ。

「これのどこに落ちつていれいられる要素があるのだ！兼太！お前
は頭がおかしいぞ！」

「まだ被害者である茉莉ちゃんから箱の中身聞いてないでしょ。も
しかしたらそれのせいかも知れないじゃんか」

「うう」

「ホント昔から結論焦りすが。もつとじっくり考えなことか。あのときだつてお菓子取つたの僕じやなかつたのに」

「ハハハハハハハハ。むかしないとを云々ぬことにだすなあああああ

会長さんの顔は真っ赤だ。

一応説明しておくと異能者とくに妖人には短気で子供っぽい人が多い。学者たち曰く「強すぎる力が精神を侵している」だそうだ。つまりここにいるもので兼太先輩以外は基本的短気で今は事務モードであるということだ。

「なんかイライラするから今から兼太ボツコボツにしてやるうーうーうー！」

「ちよ、待つて、ふしみちゃん」

「待つてください会長」

「失礼します。中央校高等部一年戌魂院茉莉さんをお連れしました」

会長さんが殴りかかるのを必死に私たちと胸倉を掴まっていた兼太
先輩に救いに手を差し伸べてくれたのはちょうど到着した茉莉さん
だった。

「あたしのものが盗まれたらしけジジの箱の？」

「この箱のです」

私は軽い木箱を彼女に見せる。

「（ ）その箱の中身は《呪々丸》って
いつ名前の刀よ」

「呪々丸？」

「そう。その名の通り呪いを生み出すための刀。人を呪い自分をも呪う『魔刀』」

お下げでおとなしそうなで容姿とは逆に滲刺とした声で話す彼女はなぜかその呪々丸とやらを『魔刀』と称した。

「なぜ『魔刀』と呼ぶ。話からすると『厄刀』が妥当だろ」

会長はそう指摘した。そうなのである。人、特に使用者を呪うものには厄災の“厄”的称号が与えられる。決して魔法の“魔”という称号が与えられることなどあり得ない。

「知らないわよ

「なぜ」

「あたしはその本当の所有者じゃないからよ。清明と本人に頼まれたからあたし名義で預けただけ」

「本当の所有者の名前は

「いつわけな「今回の犯人ですか?」「つー?」

突然姫ちゃんは口を開いた。それを聞いた茉莉さんは驚愕しているようだった。

「『ハハニリ』とだ小田」

「いえ。さつき彼女が『本当にやつたんだ、あいつ』って呟いてましたから。もしかしたらと思いましていってみました。当たりましたいですナゾ」

みんなが茉莉さんを見る。彼女は学校では『無感情』などと呼ばれるほど感情的にならない。無論、『顔に出ている』ところとも少ない。だが今は明らか動搖しているように見える。

「姫代ちゃん、ちょっと」

そんな彼女をみて兼太先輩は姫ちゃんに声をかける。すると姫ちゃんは茉莉さん以外とアイコンタクトをする。

「彼女の『反応』どう見る?」

頭の中に兼太先輩の声が響く。
これは姫ちゃんの特能 パーソナル・ネットワーク 通心 のためである。この能力は超能力で
ソルジャー・レパシー、魔法でいう念語のような機能を持っている。

「どうせ~」

「彼女の反応は演技かそうでないかどうかだと感づ~」

「私は本物だと思つ~」

一番最初に意見を述べたのは会長なんだった。

「根拠は？」

「『無感情』^{ボーカーフェイス}はこつも感情を表に出さない。つまり演技にしてしまう、さるんだ」

会長さんの説明は言葉足らずだったがいいたいことは皆わかった。あえて説明すると感情表現が乏しい茉莉さんには、感情を表現する演技が難しい可能性があるということだ。

「一理あり、だね。他には？」

兼太先輩はほかの意見がみんなに訊く。誰も答えないところからとみんな会長さんに同感のようだ。

「じゃあ、まず理事長に訊きに行こう。彼女はきっと話せないから。響子ちゃん姫代ちゃん、彼女を家まで送つてあげて」

「協力感謝する。泉と小田がお前を送つていいく

会長が代表してそつと副会長と兼太先輩を連れて出て行つてしまつた。

あれ？

私は再び茉莉さんに目を向けたときあることに気がついた。

「……茉莉さん、何が怖いんですか？」

そういった瞬間、彼女はビクッと反応した。

「響ちゃん？」

その反応であることを確信した私は姫ちゃんを（気が引けるナビ）無視して彼女に質問した。

「何に怯えているんですか？犯人に脅迫でもされたんですか？」

茉莉さんは首を振り、苦しそうな表情を浮かべて答えた。

「なんでもないわよ」

「やつは見えないけど~」

「.....」

彼女は黙ってしまった。姫ちゃんは黙つて見守つてくれている。

「あたしは『ボーカーフェイス無感情』なんて不名誉な通り名もひつてるナビ、もともとは普通なのよ」

「うん」

私は何も言わずただうなづく。

「あたしは去年やらかしてあいつに酷いものを背負わしてしまったのよ。あたしはとつて後ろめたかった」

彼女はそこに出されていたお茶を飲んだ。

「あこつは気にすんなって言ってくれたけど…………それでもあたし

は不安だった。それがあいつにとって気に食わなかつたらしきの。
それであいつはあたしを呪つた

「呪つたの！」

私たちは思わず突つ込んだ。関係がぎくしゃくしているぐらい人を呪つのかそれが私たちの共通の考えだつた。

「あいつはその時こうしたの。『お前は俺を見て不安な顔されると調子狂うんだよ。だからお前から感情を呪つ。俺のことでも不安に無くなるまでとけないからよろしく』って。最近やつとふつきれた感じで呪いが消えかけてるの。だから今怯えてるような感情が噴き出してきたの」

「…………」

この人に好かれている。

私はそんなふうに考えていたが姫ちゃんは違つたらしい。

「あいつってのが今回の犯人？」

「やうよ。お前は言わないけど

「どうしてだい？ 友達が間違いを犯したら正すのが普通じゃないかい？」

姫ちゃんは事務モードからこつもの調子に戻つて正論を言つ。

「いや、呪々丸に関しては清明がそうしりつて言つたんだ。『取り戻したいなら自分で取つとして』って

「理事長か……」

理事長はこの学園の全権を握っている。彼だそりゃりと話しているならこ
こはそう動いてしまう。

そこでケータイが鳴った。

送り主は学園だった。

『廃校』に侵入者あり。おそらく昨日の鎌鼬じもだらう。

「北条たちに連絡してあげなよ」

茉莉さんは突然そんなことを言った。

「どうこう」と

「もう時間的に清明の家あたりかな?」

彼女はそういう不敵に笑う。

その笑みで私はあることに気付いた。

「あなたがこここの場所教えたのね! で犯人つかまないよう前に先輩たちの電話に細工したの!」

「そうよー。電話してきたから気になつてね、調べたの。そしたら聖佳が負傷して検査入院中じゃない。だからわかったの。やつた奴殺しに行つたんだって」

私たちは顔を見合させ茉莉さんを置いて私は中央校へ、姫ちゃんは会長さんたちのところに向かった。

「何でこんなことするの！」

私は走りながら呟いた。私は犯人が分かっていた。

犯人それは

犬飼渡だ

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6252w/>

妖説話 The Dragon Which Attracts A Person

2011年12月20日21時46分発行